

# ID 教育の観点からの日本のプレ FD の課題と改善案

Problems and resolutions of Pre-FD in Japan on the perspective of ID Education

平岡 斉士 小林 雄志 喜多 敏博 都竹 茂樹 鈴木 克明

Naoshi HIRAOKA, Yuji KOBAYASHI, Toshihiro KITA, Shigeki TSUZUKU, Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院 教授システム学専攻

Kumamoto University

教育改善において ID と教授技法は必須となる知識でありスキルである。しかし、大学教員を志望する大学院生を対象にしたプレ FD の取り組み内容をオランダの BKO の内容と比較すると、日本のプレ FD では教授技法に比べて ID の要素を扱う比率が少なく、かつ十分な時間がかけられていない。ID の修得には時間と手間がかかるため、限られたプレ FD の時間の中では、プレ FD では ID のユーザーとなることを目標として教育を行い、ID と教授技法の相乗作用を高めることを目指すことを提案した。

<キーワード> プレ FD, インストラクショナル・デザイン, デリバリ, オランダ BKO

## 1. はじめに

本発表は、オランダの BKO と比較することで、日本のプレ FD (Faculty Development) が教授技法に比してインストラクショナル・デザイン (ID) 教育の比重が軽いことを指摘し、その改善の提案をするものである。

## 2. 日本のプレ FD

2006 年以降の大学院議会答申を受け、大学院では 2007 年、学士課程では 2008 年から大学における FD (Faculty Development) の実施が義務化された。中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申 (平成 17 年 1 月) によると、FD は「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」である。このように狭義の FD の定義は授業改善を対象としている。

FD が普及する中で、現役の大学教員だけでなく、大学教員候補である大学院生を対象とした、いわゆるプレ FD が行われ始めてきた。

日本で早い段階から所属する大学院生が将来的に教員となることを前提としてプレ FD に取り組んできた国立の研究大学 7 校の 9 つの取り組み (A~I) について、ウェブ上などで公開されている情報をもとに整理した。その際、授業内容・方法の改善に関する内容については、鈴木 (2009) にならって授業設計 (インストラクショナル・デザイン: ID) と教授技法 (デリバリ) に分類した。各取り組みの内容のバリエーションを表 1 で示す。プレ FD という名称であっても、

扱う内容は一律ではなく、授業設計が必ずしもプレ FD の必須の内容として位置づけられていないことがわかる。

表 1 日本のプレ FD の履修内容の例

大学教員に必要な知識と技能全般の修得
ティーチングスキルとライティングスキルの修得
実際に授業を担当し、それを改善していく授業研究
教授技法の知識、英語プレゼン力、海外研修
授業設計と教授技法を学ぶ
大学教育の課題の共有と教員としての自己形成
教授技法の実習と大学教育の課題を共有

各プレ FD における授業内容・方法の改善に関わる各内容と時間を表 2 に示す。9 つのプレ FD のうち、ID を単独で扱っているのは 2 つであり、それも ID のごく一部であるシラバス作成が中心であり、授業設計について明示されていない。

表 2 日本のプレ FD の内容と期間

	内容			時間		
	概要	ID	デリバリ	期間	ID にかける時間	デリバリにかける時間
A	教育デザインとデリバリについて、網羅的に教えるカリキュラム。前後にワークショップ。	シラバス作成、クラスデザイン、評価基準作成、授業設計の説明と実習	模擬授業の計画・実施・改善	2コマ×7日 (21時間)	8コマ (12時間)	6コマ (9時間)
B	ミニ講義を聞いて、そのテーマでディスカッション、ポスターワーク。		ミニ講義+議論	1日 (10:00-18:30)		2時間程度か
C	模擬公開授業を行い、その内容について検討する。デリバリ改善型。		模擬授業+議論	1日 (10:00-18:30)		1日 (10:00-18:30)
D	学部生向け講義を参加者が担当あるいは、他の参加者の授業を参観。事前事後検討会		講義担当+参観+検討会	1学期		1学期
E	大学院科目として、3年間かけて、徹底的に授業研究を行う。相互研修型。科目としての教員養成科目の改善と、プレFDの混在。		講義担当+参観+検討会	3年		3年
F	外国人講師による英語でのプレFD。ティーチングスキル (シラバス作成 or 評価基準作成) と研究スキル (ライティング・プレゼン) の実習	シラバス作成 or 評価基準作成		3コマ×5日 (22.5時間)	3コマ (4.5時間)	
G	シラバス作成・マイクロティーチング・授業参観・模擬授業・海外合宿にて、アメリカの高等教育事情を学ぶ。演習ののち、その内容について議論。	授業デザインとシラバス作成のワークショップ	マイクロティーチング、授業参観、模擬授業	4日+海外研修1週間	1日 (時間は不明。最大で6時間程度か)	2日 (時間は不明。最大で12時間程度か)
H	一般教養型プレFD。大学教員にとって必要な情報を網羅的に扱う内容。	授業の設計、学習成果の評価の説明	教授法の基礎	5コマ×3日 (22.5時間) 2単位	2コマ (3時間)	2コマ (3時間)
I	ティーチングフェローのための必須科目。大学教員としての一般教養を教える内容。	シラバス作成の説明、ワークショップ、改善とLMSの活用		3日で11コマ	4コマ (6時間)	

### 3. オランダのBKO

日本と同様に、大学教員の能力の改善を図る取り組みを行っているオランダの大学では、教員の基礎的能力の判断基準として、“University Teaching Qualification (オランダ語での略称はBKO)”を設け、2010年より大学教員は就職、昇進、テニュアトラック獲得の前に修了することが要求されている。BKOのコンピテンシーは各大学によって多少異なるが、オランダのアイントホーフェン工科大学(以下、TU/e)では(1)Developing teaching, (2)Implementing teaching(Carrying out the teaching activities), (3)Testing and assessment, (4)Organizing and coordinating teaching, (5)Evaluating teaching, (6)Professionalizationの6つである。さらにTU/eではBKOコースとして90時間(表3)とPractical Componentとして110時間を充てている。

表3 BKO コースの内容

<b>Introduction course (25 hours)</b> Teaching and learning in higher education
<b>Developing teaching methods (8 hours)</b> Course design (8 hours)
<b>Teaching (31 hours)</b> Activating teaching methods (6 hours), Voice training (8 hours) Using technology in teaching (7 hours) Supervising Master students (10 hours) or supervising PhD students (10 hours)
<b>Testing (6 to 12 hours)</b> Assessment using exams (6 hours) and/or Other types of assessment (6 hours)
<b>Evaluating education (6 hours)</b>
<b>Optional courses (8 to 14 hours)</b>

BKOはプレFDではないが、オランダでは教員の基礎的能力として何が必要でその修得にどの程度の時間が必要と考えられているかを測る材料となる。

### 4. 日本のプレFDのID教育

BKOでは大学によって内容に多少の差異はあるが、IDとデリバリ全体を修得することを目指してコースが設計されており、履修時間は200時間である。それに対して、日本は大学によって内容が大きく異なり、履修時間も20時間程度のプログラムが大半である。IDとデリバリの両方を対象としているのは9つ中の3つであり、それらも6-21時間程度であり、BKOに比すれば履修時間は少ない。IDとして分類した5つのうち

3つはシラバスや評価基準の作成が中心であり、IDの総合的な知識やスキルの教授は行われていない。デリバリについては9つのうち7つで実施されており、模擬授業やマイクロティーチングなどを実践し検討会を行う形が典型となっている。

以上から、オランダではIDとデリバリの両方が重視されているのに対し、日本のプレFDでは「授業内容・方法の改善」として、IDよりもデリバリの比重が高いように見受けられる。鈴木(2009)は、我が国のFDでは設計段階よりも、実施段階のノウハウが重視されており、カナダの大学のFD担当者が「ワークショップでは授業のデザインと教授実践の2点に焦点があてられている」と語ったことと対照的であると述べていたが、今回の調査ではプレFDの現状にも同様な傾向が見られたと言えよう。

IDと教授技法は授業改善のための両輪とも言え、両方の改善により相乗効果が期待される。教授技法の提供する授業を効果・効率・魅力的に設計するためにはIDが有効であり、授業実践の評価・改善段階でもIDの知識とスキルが有効である。一方でIDに習熟し、自らが活用できるレベルに習熟するためには時間と手間がかかるため、限られたプレFDの中で扱うのは難しいという現状もある。そこでプレFDでは、IDの基本を学び、IDのユーザーになる(=IDの研究知見を自分の実践に活用できるようになる)ところまでを目標とすることがよいだろう。

### 5. ID教育の観点からの改善案

限られたプレFDの時間の中でID教育を推進するためには、プレFDの時間外に独学教材などでの学習を取り入れ、プレFDではIDの専門家による演習などを行うなど、いわゆる反転授業形式の採用や、教員としての一般教養を得るためのプレFDとは別に、IDに特化した教育プログラムを開発し、プレFDに取り入れることが考えられる。

本研究は「特別経費(プロジェクト分)大学の特性を生かした多様な学術研究機能採択プロジェクト(7714S012628, 代表:鈴木克明)」の助成を受けて行っている。

#### 参考文献

Eindhoven University of Technology(2011) Handbook University Teaching Qualification (BKO) Portfolio, [http://w3.tue.nl/fileadmin/dpo/Basis\\_Kwalificatie\\_Onderwijs/TUe\\_Handbook\\_BKO\\_2011.pdf](http://w3.tue.nl/fileadmin/dpo/Basis_Kwalificatie_Onderwijs/TUe_Handbook_BKO_2011.pdf), (参照日 2014.07.07)

鈴木克明(2009) ファカルティ・ディベロッパーのID的基礎とは何か 日本教育工学会研究会報告集, JSET09-5, 45-48